



「おせっかい」広めへん？ 大阪から！

日本の未来を語ろう

ヘルプマークを知って積極的な手助けを 大学生が未来をひらく



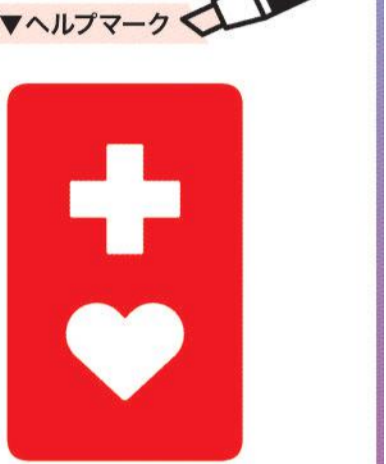
▲Osaka Metroの担当者からバリアフリーについて話を聞く大学生と櫻井純さん(写真中央)

外見からは分かりにくい障がいや病気などがある人が、援助や配慮を必要としていることを周囲に知らせる「ヘルプマーク」をご存じですか？ 2030年の日本の未来を考えるプロジェクト「朝日新聞 DIALOG」では、大阪の大学生と障がいのある人が一緒に、ヘルプマークと公共交通機関のバリアフリーの実状を知ろうとスタディーツアーを実施。ヘルプマークへの理解と手助けを広める方策を話し合いました。

バリアフリーが進展 乗客同士も声かけ合おう

7月上旬、大学生5人は櫻井純さんと、NPO法人大阪難病連広報担当の尾下葉子さんとともに、Osaka Metro 大正駅(大阪市大正区)を訪れました。案内したのは、大阪市高速電気軌道広報

スタディー ツアー 「地下鉄駅」を見て学ぶ



▲ホームと車両の段差をなくし、車椅子の乗降に対応



▲尾下葉子さんは普段からヘルプマークを身に付けている

と指摘。尾下さんは「設備が整いつつあるのは素晴らしい。皆が声をかけ合うなど配慮の仕方は、私たち乗客同士の課題でもあるのでは？」と学生に問いかけました。

「合理的配慮」の提供 大阪府も条例で義務化

続いて朝日新聞大阪本社(大阪市北区)に移動。大阪府福祉部障がい福祉企画課の中崎友梨さんが、大阪府が(一財)大阪府地域福祉推進財団と協働で、ヘルプマークの普及に努めていることを勉強会で説明しました。また大阪府は府障がい者差別解消条例を改正し、今年4月施行。障がいのある人が障がいのない人と同様に活動できるように、その場で必要とされる調整や工夫である「合理的配慮」の提供を事業者にも義務化した点も取り上げました。

身に着ける人にも悩み 行動に移して相互理解

午後は同会場で、「ヘルプマークを広めるには何をすべきか」をテーマにセッションを開催。大正駅での体験や、東京都が実施したヘルプマークに関するアンケート結果などもふまえて議論が進みました。



▲セッションではヘルプマークの現状と課題について議論が進んだ

セッション 意見・持論を語り合う

ためらわずに声かけ 「おせっかい」を広める

お二人の率直なお話、学生からも様々な意見が飛び出しました。大阪府立大学4年、竹田光貴さんは「僕はボランティアで障がいがある人と接体験をしています。接体験や講演会など身近に関係性を築ける機会があれば、もっとヘルプマークが広がり、目に見えない障がいも理解されるのでは」と提案します。



▲当事者や行政担当者とも意見交換し、議論が盛り上がった



「ヘルプマークストラップ」「ヘルプカード」は大阪府の場合、府庁福祉部障がい福祉企画課(大阪市中央区大手前)のほか、府各保健所、市区町村担当窓口などで無償配布されています。※障がい種別・等級、病名などによる条件はありません。

学生たちの声

～未来に向けて～

体験して多くの気づき

大阪大学4年 竹田光貴さん
今までバリアフリーや段差、ヘルプマークを意識して見たことがなかったので、気づきになるすごくいい機会でした。トイレなど皆が見る場所にヘルプマークとその説明があれば、もっと広がると思います。



勇気を出して声をかける

大阪府立大学4年 竹田光貴さん
大学で福祉を学んでいますが、机上の空論になりやすく、分かっているけど実際どうすればいいかが課題でした。いろんな人の話を聞いて、勇気を出して声をかけて、社会を変えていこうと思いました。



傍観せずに自分ごとに

大阪大学4年 瀬渡ゆかりさん
助けたいという気持ちは誰にでもあるはず。ヘルプマークを着けている人に、自分には何もできないんじゃないかと傍観して距離がありました。自分ごととしてとらえて、積極的に関わっていこうと思いました。



周りに話して広めたい

大阪市立大学大学院2年 川中大地さん
SNSなどでヘルプマークを広めるのもいいですが、ヘルプマークのことを周りに話すなど、人と人のコミュニケーションで直接伝えたほうが、今日の僕のように、心に強く残りやすいと思いました。



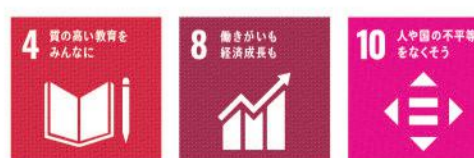
まず心遣いから始めよう

大阪大学4年 生貝運香さん
街がバリアフリーになったから問題がすべて解決するわけではない。周りの人の心遣いが大切だと改めて痛感しました。これからヘルプマークの人を見かけたら声をかけたり席を譲ったりしようと思います。



SDGsとつながる

平等医療 平等介護



伯鳳会グループは、皆様の健康のお世話をさせていただくために、保健・医療・福祉を業務として60を超える事業所を運営するグループです。共通理念は「平等医療、平等介護」。誰一人取り残さず、共に生きる社会の実現を目指すため、自らの利益を目的とせず、職員一人ひとりが率先して地域社会の現状把握と環境整備に積極的に取り組み、その認知拡大に寄与することを誓います。障がいのある方の「ために」ではなく「ともに」、皆様の健康な暮らしに少しでも寄与することができればこれに勝る幸せはございません。伯鳳会グループのこれからの御期待ください。



伯鳳会グループは持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。